

# 選挙と折伏

——創価学会男女青年部の体験談・決意文集からみる 1967 年の衆院議員選挙——

立命館大学大学院 浅山太一

## 1 目的

この報告の目的は、「創価学会の政治参加の内的論理を現場の会員レベルで明らかにすること」にある。これまでの創価学会の政治参加について大きな影響力を持っていた研究として西山 [1975] が挙げられるが、同論文は当時の創価学会の政治進出を根拠づけた教義である「戒壇論」の変遷に着目し、1964 年の衆院進出表明＝公明党の結成と 69-70 年の言論出版妨害事件／言論問題を重視した。この二つの事件を契機とした社会からの圧力により、創価学会は「セクト的」な教義である国立戒壇論を放棄し、社会化したと結論付けられている。この西山の議論は大きな修正もされず現在に至っているが、浅山 [2017] では主にリーダー層の発言を歴史的に跡づけることで、創価学会の政治参加には 1964 年以降も宗教性が強く残存していることを明らかにした。この報告では、公明党結党後、初の衆院選である 1967 年 1 月の第 31 回衆議院議員総選挙に当時の創価学会が込めたものを会員レベルで明らかにすることで、西山ら既存の議論にさらなる修正を迫りたい。

## 2 方法

そこで、主な資料として 1966 年に創価学会が刊行した体験談・決意文集である創価学会女子青年部 [1966] と創価学会男子青年部 [1966] を採用する。本資料は、当時の部隊長以上の役職を持つ全国の男女青年部の体験談と決意文を集めたものである。収録人数は約 6000 名に及ぶが、これら資料内の体験談・決意文を主に「衆院選をどのように語っているか」という観点から抽出し、整理する。

## 3 結果

分析の結果、「自身の健康や日々の仕事、または鼓笛隊や合唱団といった文化活動」と「折伏という直接的な布教活動」、「日本という国家レベル、さらには世界レベルでの天候や政治・経済情勢」と「創価学会（公明党）の政治進出」、または「宗祖である日蓮」と「当時の会長である池田大作」など、世俗的な観点では相互に分節化されるはずの諸相がシームレスに接続し、緊密に影響しあっているホーリスティックな世界観が明らかとなった。

## 4 結論

以上から、西山茂をはじめとした既存の創価学会研究者らが維持していた、創価学会の政治参加のデノミネーション化の指標として過度に国立戒壇論を強調する議論はさらに説得力を失う。国立戒壇論は撤回されたが、信仰活動と選挙活動は彼ら彼女らの宗教世界の中で分かちがたく結びついていた。彼ら彼女らの公明党支援は自らの信仰世界の拡大のための戦い（＝広宣流布）以外のものではなく、創価学会の政治参加は初の衆院選を控えた 1966 年末の時点で未だ濃密な宗教性を帯びている。

## 文献

浅山太一, 2017, 『内側から見る 創価学会と公明党』ディスカヴァー・トゥエンティワン。

創価学会女子青年部, 1966, 『MY EXPERIENCE 私の体験 Vol.2』私の体験刊行委員会。

創価学会男子青年部, 1966, 『革命児 第二巻』革命児刊行委員会。

西山茂, 1975, 「日蓮正宗創価学会における『本門戒壇』論の変遷—政治的宗教運動と社会統制」中尾堯編『日蓮宗の諸問題』雄山閣出版。